

中国怪奇小説集

宣室志（唐）

岡本綺堂

青空文庫

第四の男は語る。

「わたくしは『宣室志』のお話をいたします。この作者は唐の張読ちやうどくであります。張は字を聖朋あざなせいほうといい、年十九にして進士しんしに登第とうだいしたという俊才で、官は尚書左丞しょうしよさじやうにまで登りました。祖父の張薦ちやうせんも有名の人物で、張薦はかの『遊仙窟』や『朝野僉載』いを書いた張文成ぶんせいの孫にあたるように聞いて居ります。

この書も早く渡来しましたので、わが国の小説や伝説に少なからざる影響をあたえているようにございます」

七聖画

唐の長安ちやうあんの雲花寺うんげじに聖画殿があつて、世にそれを七聖画と呼んでいる。

この殿堂が初めて落成したときに、寺の僧が画工をまねいて、それに彩色画さいしきがを描かせようとしたが、画料が高かったので相談がまとまらなかった。それから五、六日の後、ふたりの少年がたずねて来た。

「われわれは画を善く描く者です。このお寺で画工を求めているということを聞いて参りました。画料は頂戴するに及びませんから、われわれに描かせて下さいませんか」

「それではお前さん達の描いた物を見せてください」と、僧は言った。

「われわれの兄弟は七人ありますが、まだ長安では一度も描いたことがありませんから、どこの画を見てくれというわけには行きません」

そうになると、やや不安心にもなるので、僧は少しく躊躇ちゅうちよしていると、少年はまた言つた。

「しかし、われわれは画料を一文も頂戴しないのですから、もしお気に入らなかつたならば、壁を塗り換えるだけのことで、さしたる御損もありますまい」

なにしろ無料ただというのに心を惹ひかされて、僧は結局かれらに描かせることにすると、それから一日の後、兄弟と称する七人の少年が画の道具をたずさえて来た。

「これから七日のあいだ、決してこの殿堂の戸をあけて下さるな。食い物などの御心配に及びません。画えの具の乾えかないうちに風や日にさらすことは禁物ですから、誰も覗のぞきに来てはいけません」

こう言つて、かれらは殿堂のなかに閉じ籠つたが、それから六日のあいだ、堂内はひつ

そりしてなんの物音もきこえないので、寺の僧等も不審をいだいた。

「あの七人はほんとうに画を描いているのかしら」

「なんだかおかしいな。なにかの化け物がおれ達をだまして、とうに消えてしまったのではないかな」

評議まちまちの結果、ついにその殿堂の戸をあけて見ることになった。幾人の僧が忍び寄って、そつと戸をあけると、果たして堂内に人の影はみえなかった。七羽の鴿はとが窓から飛び去って、空中へ高く舞いあがった。

さてこそと堂内へはいって調べると、壁画は色彩うるわしく描かれてあつたが、約束の期日より一日早かつたために、西北の窓ぎわだけがまだ描き上げられずに残っていた。その後に幾人の画工がそれを見せられて、みな驚嘆した。

「これは実に靈妙の筆である」

誰も進んで描き足そうという者がないので、堂の西北の隅だけは、いつまでも白いままに残されている。

法喜寺の龍

政陽郡の東南に法喜寺ほうきじという寺があつて、まさに渭水いすいの西に當つていた。唐の元和げんなの末年に、その寺の僧がしばしば同じ夢をみた。一つの白い龍りゅうが渭水から出て来て、仏殿の軒にとどまつて、それから更に東をさして行くのである。不思議な事には、その夢をみた翌日にはかならず雨が降るので、僧も怪しんでそれを諸人に語ると、清浄の仏寺に龍が宿るといふのは、さもありそうなことである。そのしるしとして、仏殿の軒に土細工の龍を置いたらどうだという者があつた。

僧も同意して、職人に命じて土の龍を作らせることになった。惜しむらくはその職人の名が伝わっていないが、彼は決して凡手ではなかつたと見えて、その細工は甚だ巧妙に出来あがつて、寺の西の軒に高く置かれたのを遠方から瞰みあげると、さながらまことの龍のわだかまつていふようにも眺められた。

長慶ちやうけいの初年に、その寺中に住む人で毎夜門外の宿舎に眠るものがあつた。彼はある夜、寺の西の軒から一つの物が雲に乘るように飄々ひょうひょうと飛び去つて、渭水の方角へむかつたかと思うと、その夜半に再び歸つて来たのを見たので、翌日それを寺僧に語ると、僧もすこぶる不思議に思つていた。

それからまた五、六日の後、村民の齋ときに呼ばれて、寺中の僧は朝からみな出てゆくと、その留守の間にかの土龍の姿が見えなくなつたので、人びとはまた驚かされた。

「たとい土で作つた物でも、龍の形をなす以上、それが霊ある物に変じたのであらう」

こう言つていると、その晩に渭水の上から黒雲が湧き起つて、次第にこの寺をつつむように迫つて来たかと思ふうちに、その雲のあいだから一つの物が躍り出て、西の軒端へ流れるように入り込んだので、寺の僧らはまた驚き怖れた。やがて雲も収まり、空も明るくなつたので、かの軒の下にあつまつて瞰あげると、土龍は元の通りに歸つていたが、その鱗うろこつも角もみな一面に湿ぬれているのを発見した。

その以来、龍の再び抜け出さないように、鉄の鎖くさりをもつて繋いで置くことにした。早かんば魃つのときに雨を祈れば、かならず奇特きどくがあると伝えられている。

阿弥陀仏

宣城郡せんじょうぐん、当塗とうとの民に劉成りゅうせい、李暉りきの二人があつた。かれらは大きい船に魚や蟹かにのたぐいを積んで、呉ごや越えつの地方へ売りに出ていた。

唐の天^{てん}宝^{ぼう}十三年、春三月、かれらは新^{しん}安^{あん}から江を渡つて丹^{たん}陽^{よう}郡にむかい、下^か查^さ浦^ほというところに着いた。故郷の宣城を去る四十里（六丁一里）の浦である。日もすでに暮れたので、二人は船を岸につないで上陸した。

そこで、李は岸の人家へたずねて行き、劉は岸のほとりとどまっていると、夜は静かで水の音もひびかない。その時、たちまち船のなかで怪しい声がきこえた。

「阿弥陀仏、阿弥陀仏」

おどろいて透かして視ると、一尾の大きい魚が船のなかから鬚^{ひげ}をふり、首をうごかして、あたかも人の声をなして阿弥陀仏を叫ぶのであった。劉はぞっとして、蘆^{あし}のあいだに身をひそめ、なおも様子をうかがっていると、やがて船いっぱい魚が一度に跳ねまわって、みな口々に阿弥陀仏を唱え始めたので、劉はもう堪^たまらなくなつて、あわてて船へ飛び込んで、船底にあるだけの魚を手あたり次第に水のなかへ投げ込んだ。

全部の魚を放してしまったところへ、李が戻つて来た。彼は劉の話をきいて大いに怒つた。

「ばかばかしい。おれたちは今夜初めてこの商売をするのじゃあねえ。魚なんぞが化けて堪まるものか」

劉がいかにも説明して聞かせても、李は決して信じなかった。商売物の魚をみんな捨ててしまつてどうするのだと、彼は激しく劉に食つてかかるので、劉もその言い訳に困つて、とうとう李の損失だけを自分がつぐなうことにした。そうになると、剩すところは僅かに百錢に過ぎないので、劉はその村で荻^{わぎ}十余束を買い込み、あしたの朝になったら船に積むつもりで、その晩は岸のほとりに横たえて置いた。

さて翌朝になつて、いよいよそれを積み込もうとすると、荻の束がひどく重い。怪しんでその束を解いてみると、縉^{さし}になつてゐる錢^{ぜに}一万五千を発見した。それには「汝に魚の錢を歸^きす」と書いてあつた。劉はますます奇異の感を深うして、瓜洲^{かしゅう}に僧侶をあつめて読経をしてもらつた上に、かの錢はみな施して歸つた。

柳將軍の怪

東洛^{とうらく}に古屋敷があつて、その建物はすこぶる宏壮であるが、そこに居る者は多く暴死^{ぼうし}するので、久しく鎖^{とぎ}されたままで住む者もなかった。

唐の貞元^{ていげん}年中に盧虔^{ろけん}という人が御史^{ぎよし}に任ぜられて、宿所を求めた末にかの古屋敷を見

つけた。そこには怪異があるといって注意した者もあつたが、盧は肯^きかなかつた。

「妖怪があらわれたらば、おれが鎮めてやる」

平気でそこに移り住んで、奴僕^{しもべ}どもはみな門外に眠らせ、自分は一人の下役人と共に座敷のまん中に陣取つていた。下役人は勇悍^{ゆうかん}にして弓を善^よくする者であつた。

やがて夜が更けて来たので、下役人は弓矢をたずさえて軒下に出ていると、やがて門を叩く者があつた。下役人は何者だとたずねると、外では答えた。

「柳將軍^{りゅう}から盧君に書面をお届け申す」

言うかと思うと、一幅^{いっふく}の書がどこからとも知れずに軒下へ舞い落ちた。それは筆をもつて書いたもので、字画^{じかく}も整然と読まれた。その文書の大意は——我はここに年久^{とし}しく住んでいて、家屋門戸^{もんこ}みな我が物である。そこへ君が突然に入り込んで済むと思うか。もし君の住宅へ我々が突然に踏み込んだら、君もおそらく捨てては置くまい。左様な不法を働いて、君はたとい我を懼^{おそ}れずと誇るとも、省^{かえり}みて君のところに恥じないであろうか。君はみずから悔い改めて早々に立ち去るべきである。小勇を恃^{たの}んで大敗の辱^{はじこ}を蒙^{こう}るなかれ。――

このいかめしい抗議文をうけ取つて、盧はまだ何とも答えないうちに、その紙は灰のご

とくにひらひらと散ってしまった。つづいて又、物々しく呼ぶ声がきこえた。

「柳將軍、御意を得申す」

忽然として現われ出でたのは、身のたけ数十尋（一尋は六尺）もあろうかと思われる

怪物で、手に一つの瓢をたずさえて庭先に突つ立った。下役人は弓を張って射かけると、矢は彼の手にある瓢にあたつたので、怪物はいったん退いてその瓢を捨てたが、更にまた進んで来て、首を俯してこちらの様子を窺っているらしいので、下役人は更に二の矢を射かけると、今度はその胸に命中したので、さすがの怪物も驚いたらしく、遂にうしろを見せておめおめと立ち去った。

夜が明けてから彼の来たらしい方角をたずねると、東の空き地に高さ百余尺の柳の大樹があつて、ひと筋の矢がその幹に立っていたので、いわゆる柳將軍の正体はこれであることが判った。それから一年あまりの後に家屋の手入れをすると、家根瓦の下から長さ一丈ほどの瓢を発見した。その瓢にもひと筋の矢が透っていた。

黄衣婦人

唐の柳宗元^{りゅうそうげん}先生が永州^{えいしゅう}の司馬^{しば}に左遷される途中、荊門^{けいもん}を通過して駅舎に宿ると、その夜の夢に黄衣の一婦人があらわれた。彼女は再拝して泣いて訴えた。

「わたくしは楚水^{そすい}の者でございますが、思わぬ禍いに逢いまして、命も朝夕^{ちようせき}に迫って居ります。あなたでなければお救い下することは叶いません。もしお救い下されば、長く御恩を感謝するばかりでなく、あなたの御運をひるがえして、大臣にでも大將にでも御出世の出来るように致します」

先生も無論に承知したが、夢が醒めてから、さてその心あたりがないので、ついそのままにしてまた眠ると、かの婦人は再びその枕元にあらわれて、おなじことを繰り返して頼んで去った。

夜が明けかかると、土地の役人が来て、荊州の帥^{そう}があなたを御招待して朝飯をさしあげたいと言った。先生はそれにも承知の旨を答えたが、まだ東の空が白みかけたばかりであるので、又もやうとうと眠っていると、かの婦人が三たび現われた。その顔色は惨として、いかにも危難がその身に迫っているらしく見えた。

「わたくしの命はいよいよ危うくなりました。もう半ときの猶予もありません。どうぞ早くお救いください。お願いでございます」

一夜のうちに三度もおなじ夢を見たので、先生も考えさせられた。あるいは何か役人らのうちに不幸の者でもあるのかと思つた。あるいは今朝の饗応について、何かの鳥か魚が殺されるのではないかとも思つた。いずれにしても、行つてみたら判るかも知れないと思つたので、すぐに支度をして饗宴の席に臨んだ。そうして、主人にむかつてかの夢の話をする、彼も不思議そうに首をかたむけながら、ともかくも下役人を呼んで取調べると、役人は答えた。

「実は一日前に、大きい黄魚こうぎよ（石首魚いしもち）が漁師の網にかかりましたので、それを料理してお客さまに差し上げようと存じましたが……」

「その魚はまだ活かしてあるか」と、先生は訊いた。

「いえ、たつた今その首を斬りました」

先生は思わずあつと言つた。今更どうにもならないが、せめてもの心ゆかしに、その魚の死骸を河へ投げ捨てさせて出発した。

その夜の夢に、かの黄衣の婦人が又もや先生の前にあらわれたが、彼女には首がなかった。それがためか、先生は大臣にも大将にもなれず、ついに柳州の刺史ししをもつて終つた。

玄陰池

太原たいげんの商人に石憲せきけんという者があつた。唐の長慶ちやうけい二年の夏、北方へあきないに行つて、雁門関がんもんかんを出た。時は夏の日盛りで、旅行はすこぶる難儀であるので、彼は路ばたの大樹の下に寝ころんでいるうちに、いつかうとうと眠ってしまった。

たちまちにそこへ一人の僧があらわれた。かれは褐かつしよく色の法衣ころもを着て、その顔も風体ふうていもなんだか異様にみえたが、石せきにむかつて親しげに話しかけた。

「われわれは五台山の南に廬いおりを構えていた者でござるが、そのあたりは森も深く、水も深く、塵俗じんぞくを遠く離れたところでござれば、あなたも一緒にお出でなさらぬか。さもないと、あなたは暑さにあたつて死にましようぞ」

実際暑さに苦しんでいるので、石はその言うがままに誘われてゆくと、西のかた五、六里のところ果たして密林があつて、大勢の僧が水のなかを泳ぎまわっていた。

「これは玄陰池げんいんちといい、わが徒はここに水浴して暑氣を凌ぐのでござる」

僧はこう説明して、彼を案内した。石はそのあとに付いて池のまわりをめぐるっているうちに、ふと氣の付いたのは大勢の僧の顔がみな一様で、どの人の眼鼻も少しも異ことなっていない

いことであつた。やがて日が暮れかかると、僧はまた言つた。

「お聴きなされ、衆僧がこれから梵ぼんおん音を唱え始めます」

石は池のほとりに立つて耳をかたむけていると、たちまちに水中の僧らが一齐に声をそろえて、なにか判わからない梵音を唱え出した。その声が甚だ騒々しいと思つてみると、一人の僧が水中から手を出して彼を引いた。

「あなたも試しにはいつて御覧ごらんなされ。決して怖いことはござらぬ」

引かるるままに彼は池にはいつていると、その水の冷たいこと氷のごとく、思わずぞつと身ぶるいすると共に、半日の夢は醒めた。彼はやはり元の大樹の下に眠つていたのである。しかしその衣服はびしょ濡ぬれになつていて、からだには惡寒さむけがするので、彼は早々にそこを立ち去つて、近所の村びとの家に一夜を明かした。

翌日は気分も快よくなつたので、きのうの通りにあるき出すと、路ばたに蛙かわずの鳴く声がそうぞうしくきこえた。それがかの僧らのいわゆる梵音に甚だ似ているので、彼は俄かに思い当ることがあつた。夢のうちの記憶をたどりながら、五、六里ほども西の方角へたずねて行くと、そこには深い森もあり、大きい池もあつた。池のなかにはたくさんさんの蛙が浮かんでいた。

「坊主の正体はこれであつたか」

彼はその蛙を片端から殺し尽くした。

鼠の群れ

洛陽らくように李氏りしの家があつた。代々の家訓で、生き物を殺さないことになっているので、大きい家に一匹の猫をも飼わなかつた。鼠を殺すのを忌むいが故である。

唐の宝応ほうおう年中、李の家で親友を大勢よびあつめて、広間で飯を食うことになった。一同が着席したときに、門外に不思議のことが起つたと、奉公人らが知らせて来た。

「何百匹という鼠の群れが門の外にあつまつて、なにか嬉しそうに前足をあげて叩いて居ります」

「それは不思議だ。見て来よう」

主人も客も珍しがつてどやどやと座敷を出て行つた。その人びとが残らず出尽くしたときに、古い家が突然に頽くずれ落ちた。かれらは鼠に救われたのである。家が頽れると共に、鼠はみな散りぢりに立ち去つた。

陳巖の妻

舞陽ぶようの人、陳巖ちんがんという者が東吳とうごに寓居ぐうきよしていた。唐の景龍けいりゅうの末年に、かれは孝廉こうれんにあげられて都へゆく途中、渭南いなんの道で一人の女に逢った。かれは白衣はくいをつけた美女で、袂たもとをもつて口を被おおいながら泣き叫んでいるのである。

見すごしかねてその子細をきくと、女は泣きながら答えた。

「わたくしは楚その人で、侯こうという姓の者でございます。父はこころざしの高い人物として、湘楚しやうそのあいだに知られて居りましたが、山林に隠れて富貴榮達ふつきえいたつを望みませんでした。しかし沛国はいの劉りゅうという人とは親しい友達でありまして、その関係からわたくしはその劉家りゅうけへ縁付えんづくことになりました。それから丁度十年になりました、自分としてはなんの過失あやまちもないつもりで居りますのに、夫は昨年から更に盧氏ろの娘を娶めとりましたので、家内に風波が絶えません。又その女が気の強い乱暴な生まれ付きで、わたくしのような者にはしよせん同棲はできません。そんなわけで、逃げ出したような、逐い出されたような形で、劉家を立ち退いたのでございますが、どこへ行くという目的めあてもないので、こうして路頭ろとうに迷つ

ているのでございます」

陳は律義^{りちぎ}一方の人物であるので、初対面の女の訴えることをすべて信用してしまった。なにしろ行く先がなくては困るであろうと、一緒に連れ立って行くうちに、いつか夫婦のような関係が結ばれて、都へのぼって後も永崇里^{えいそうり}というところに同棲していた。然るにこの女、最初のあいだは大層つましやかであつたが、だんだんに乱暴の本^{ほん}性^{しょう}をあらわして、時には氣ちがいのようになつて我が夫に食つてかかることもあるので、飛んだ者と夫婦になつたと、陳も今さら悔んでいた。

ある日、陳が外出すると、その留守のあいだに妻は夫の衣類をことごとく庭先へ持ち出して、みなずたずたに引き裂いたばかりか、夕方になつて陳が戻つて来ると、彼女は門を閉じて入れないのである。陳も怒つて、門を叩き破つて踏み込むと、前に言つたような始末であるので、彼はいよいよ怒つた。

「なんで夫の着物を破つてしまったのだ」

その返事の代りに、妻は夫にむしり付いた。そうして、今度はその着ている物をむやみに引き裂くばかりか、顔を引つ掻く、手に食いつくという大乱暴に、陳もほとほと持て余していると、その騒動を聞きつけて、近所の人や往来の者がみな門^{かどぐち}口にあつまって来た。

そのなかに郝居士かくこじという人があつた。かれは邪を攘はらい、魔を降くだすの術をよく知っていた。

居士は表から女の泣き声を聞いて、あたりの人にささやいた。

「あれは人間ではない。山に棲む獣けものに相違ない」

それを陳に教えた者があつたので、陳は早速に居士を招じ入れると、妻はその姿をみて俄かに懼れた。居士は一紙の墨符ぼくふを書いて、空にむかつてなげうつと、妻はひと声高く叫んで、屋根瓦がわらの上に飛びあがつた。居士はつづいて一紙の丹符たんぷをかいて投げつけると、妻は屋根から転げ落ちて死んだ。それは一匹の猿であつた。

その後、別に何の祟りもなかったが、陳はあまりの不思議に渭南をたずねて、果たしてそこに劉という家があるかと聞き合わせると、その家は郊外にあつた。主人の劉は陳に向つてこんな話をした。

「わたしはかつて弋陽よくようの尉じようを勤めていたことがあります。その土地には猿が多いので、わたしの家にも一匹を飼っていました。それから十年ほど経つて、友達が一匹の黒い犬を持って来てくれたので、これも一緒に飼つておくと、なにぶんにも犬と猿とは仲が悪く、猿は犬に咬かまれて何処へか逃げて行つてしまいました」

李生の罪

唐の貞元年中に、李生りせいという者が河朔かきくのあいだに住んでいた。少しく力量がある上に、俠客肌の男であるので、常に輕薄少年らの仲間にはいつて、人もなげにそこらを横行していた。しかも二十歳はたちを越える頃から、俄かにこころを改めて読書をはげみ、歌詩をも巧みに作るようになった。

それから追いおいに立身して、深州しんの録事参軍ろくじさんぐんとなつたが、風采も立派であり、談話も巧みであり、酒も飲み、鞠まりも蹴る。それで職務にかけては廉直れんちよくというのであるから申し分がない。州の太守も彼を認めて、将来は大いに登庸とうようしようとも思っていた。

その頃、成徳軍せいとくの帥そうに王武俊おうぶしゆんという大將があつた。功を恃たのんで威勢を振うので、付近の郡守はみな彼を恐れていると、ある時その子の士真ししんをつかわして、付近の各州を巡検させることになつて、この深州へも廻つて来た。深州の太守も王を恐れている一人であるので、その子の士真に対しても出来るだけの敬意を表して歓待した。しかし迂闊うかつな者を酒宴の席に侍らせて、酒の上から彼の感情を害すような事があつてはならないという遠慮から、すべての者を遠ざけて、酒席の取持ちは太守一人が受持つことにした。それが士真の

気になつて、さすがに用意至れり尽くせりと喜んでいたが、昼から夜まで飲み続けているうちに、太守ひとりでは持ち切れなくなつて来た。土真の方でも誰か變つた相手が欲しくなつた。

「今夜は格別のおもてなしに預かつて、わたしも満足した。しかしあなたと二人ぎりでは余りに寂しい。誰かあいきやく相客へんどを呼んで下さらんか」

「何分にもこの通りの偏士でござりまして……」と、太守は答えた。「お相手になるような者が居りません。しいて探しますれば、録事参軍の李と申すものが、何か少しはお話が出来るかとも存じますが……」

それと呼んでくれというので、李はすぐに召出された。そうして、酒の席へ出て来ると、土真の顔色は俄かに變つた。李は行儀正しく坐に着くと、土真の機嫌はいよいよ悪くなつた。太守も不思議に思つて、ひそかに李の方をみかえると、彼も色蒼ざめて、杯を執とることも出来ないほどに顫ふるえているのである。やがて土真は声を厲はげしゆうして、自分の家来に指図した。

「あいつを縛つて獄屋につなげ」

李は素直に引つ立てられて去ると、土真の顔色はまたやわらいで、今まで通りに機嫌よ

く笑いながら酒宴を終った。太守はそれで先ずほっとしたが、一体どういふわけであるのか、それがちつとも判らないので、獄中に人をつかわしてひそかに李にたずねさせた。

「お前の礼儀正しいのは、わたしもふだんから知っている。殊に今夜はなんの落度もなかったように思われる。それがどうして王君の怒りに触れたのか判らない。お前に何か思い当ることがあるか」

李はしばらく噉り泣きをしていたが、やがて涙を呑んで答えた。

「因果応報という仏氏の教えを今という今、あきらかに覚りました。わたくしの若いときは放蕩無頼ほうとうぶらいの上に貧乏でもありましたので、近所の人びとの財物を奪い取った事もしばしばあります。馬に乗り、弓矢をたずさえ、大道だいどうを往来して旅びとをおびやかしたこともあります。そのうちに或る日のこと、一人の少年が二つの大きい囊ふくろを馬に載せて来るのに逢いました。あたかも日が暮れかかって、左右は断崖絶壁のところであるので、わたくしはかの少年を崖から突き落して、馬も囊も奪い取りました。家へ帰って調べると、囊のなかには綾絹あやぎぬが百余反たんもはいていましたので、わたくしは思わぬ金儲けをいたしました。それを機会に悪行あくぎようをやめ、門を閉じて読書に努めたお蔭で、まず今日の身の上になりましたが、数えてみるとそれはもう二十七年の昔になります。昨夜お召しに因って

王君の前に出ますと、その顔かおかたち容が二十七年前に殺したかの少年をその儘ままであるので、わたくしも実におどろきました。王君がむかしの罪を覚えていられるかどうかは知りませんが、わたくしとしては王君に殺されるのが当然のことで、自分も覚悟しています」

太守はその報告を聞いて驚嘆していると、土真は酒の酔いが醒めて、すぐに李の首を斬つて来いと命令した。太守は命乞いをするすべもなく、その言うがままに李の首を渡すと、彼はその首をみてころよげに笑っていた。

「自分の部下にかような罪人をいしましたのは、わたくしが重々の不行き届きでございですが、一体かれはどういうことで御機嫌を損じたのでございましょうか」と、太守はさぐるように訊いてみた。

「いや、別に罪はない」と、土真は言った。「ただその顔をみるとなんだか無暗むやみに憎くなつて、とうとう殺す気になったのだ。それがなぜであるかは自分にもよく判わからない。もう済んでしまったことだから、その話は止そうではないか」

彼自身にもはつきりした説明が出来ないらしかった。太守はさらに土真の年を訊くと、彼はあたかも三十七歳であることが判つたので、李の懺悔の嘘ではないのがいよいよ確かめられた。

黒犬

唐の貞元年中、大理評事だいりひようじを勤めている韓かんという人があつて、西河郡せいがの南に寓居していたが、家に一頭の馬を飼っていた。馬は甚だ強い駿しゅんそく足であつた。

ある朝早く起きてみると、その馬は汗をながして、息を切つて、よほどの遠路をかけ歩いて来たらしく思われるので、厩うまやの者は怪しんで主人に訴えろと、韓は怒つた。

「そんないい加減のことを言つて、実は貴様がどこかを乗り廻したに相違あるまい。主人の大切な馬を疲らせてどうするのだ」

韓はその罰として厩うまやの者を打つた。いずれにしても、厩を守る者の責任であるので、彼はおとなしくその折檻せつかんを受けたが、明くる朝もその馬は同じように汗をながして喘あえいでいるので、彼はますます不思議に思つて、その夜は隠れてうかがっていると、夜がふけてから一匹の犬が忍おどんで来た。それは韓の家に飼っている黒犬であつた。犬は厩にはいつてひと声叫んで跳りあがるかと思うと、忽ちに一人の男に變つた。衣服も冠もみな黒いのである。かれは馬にまたがつて傲然ごうぜんと出て行つたが、門は閉じてある、垣は甚だ高い。か

れは馬にひと鞭むちくれると、駿馬しゅんめは跳おどつて垣を飛び越えた。

こうしてどこへか出て行つて、かれは暁け方になつて戻つて来た。厩にはいつて、かれはふたたび叫んで跳りあがると、男の姿はまた元の犬にかへつた。厩の者はいよいよ驚いたが、すぐには人には洩ならさないで猶なほも様子をうかがっていると、その後のある夜にも黒犬は馬に乗つて出て、やはり暁け方になつて戻つて来たので、厩の者はひそかに馬の足跡をたずねて行くと、あたかも雨あがりの泥がやわらかいので、その足跡ははつきりと判つた。韓の家から十里ほどの南に古い墓があつて、馬の跡はそこに止まっているので、彼はそこに茅かやの小家を急造して、そのなかに忍んでいることにした。

夜なかになると、黒衣の人が果たして馬に乗つて来た。かれは馬をそこらの立ち木につないで、墓のなかにはいつて行つたが、内には五、六人の相手が待ち受けているらしく、なにか面白そうに笑っている話し声が洩れた。そのうちに夜も明けかかると、黒い人は五、六人に送られて出て来た。褐色の衣服を着ている男がかれに訊いた。

「韓いえの家の名簿はどこにあるのだ」

「家の砧うちきぬたいし石の下にしまつてあるから、大丈夫だ」と、黒い人は答えた。

「いいか。気をつけてくれ。それを見付けられたら大変だぞ。韓の家の子供にはまだ名が

ないのか」

「まだ名を付けないのだ。名が決まれば、すぐに名簿に記入して置く」

「あしたの晩もまた来いよ」

「むむ」

こんな問答の末に、黒い人は再び馬に乗って立ち去った。それを見とどけて、厩の者は主人に密告したので、韓は肉をあたえるふうをよそおって、すぐにかの黒犬を縛りあげた。それから砧石の下をほり返すと、果たして一軸いちじくの書が発見されて、それには韓の家族は勿論、奉公人どもの姓名までが残らず記入されていた。ただ、韓の子は生まれてからひと月に足らないので、まだその字を決めていないために、そのなかにも書き漏らされていた。一体それがなんの目的であるかは判らなかつたが、ともかくもこんな妖物をそのままにして置くわけにはゆかないので、韓はその犬を庭さきへ牽ひき出させて撲ぼくさつ殺した。奉公人どもはその肉を煮て食つたが、別に異状もなかつた。

韓はさらに近隣の者を大勢駆り集めて、弓矢その他の得物えものをたずさえてかの墓あばを発かせると、墓の奥から五、六匹の犬があらわれた。かれらは片端からみな撲殺されたが、その毛色も形も普通の犬とは異つていた。

神

俗に伝う。人が死んで数日の後、^{ひつぎ}柩のうちから鳥が出る、それを^{さつ}という。

太和中、^{ていせい}鄭生というのが一羽の^{おお}巨きい鳥を網で捕った。色は^{あお}蒼く、高さ五尺余、押えようとすると忽ちに見えなくなつた。

里びとをたずねて聞き合わせると、答える者があつた。

「ここに死んで五、六日を過ぎた者があります。うらない者の言うには、きようはその家を去るであらうと。そこで、忍んで伺っていますと、色の蒼い巨きい鳥が棺の中から出て行きました。あなたの網に入つたのは恐らくそれでありましょう」

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社文庫、光文社

1994（平成6）年4月20日初版1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

宣室志（唐）

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>